



**20th**  
Anniversary  
PHOTO CITY SAGAMIHARA

フォトシティさがみはら第20回記念事業 「ブラジル現代写真展」

## コスモ・カオス—混沌と秩序 現代ブラジル写真の新たな展開

Photo City SagamiHara 20th Anniversary Exhibition

**Cosmo-Chaos : New perspective in Contemporary Brazilian Photography**

2021.7.7 [水] — 7.19 [月]



ルイス・ブラガ《ナショナル・コンステレーション》2019年 ©Luiz Braga

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、相模原市ではブラジル代表選手団の事前キャンプが行われます。これを機に、ブラジルのことを知り、友好を深めるため、20周年記念事業の一つとしてブラジルの写真家による写真展を開催いたします。

写真家たちの視点から捉えたブラジルの歴史や文化などを紹介し、新たな発見と感動を提供することにより、相互理解の促進と五輪に向けて機運の醸成を図ります。

## 本展の見所

### 1. ブラジルの歴史や文化を知る

ブラジルと日本は2020年に国交樹立125周年を迎えました。日系人が世界で最も多く居住するブラジル。地域にブラジルタウンが形成されて国際交流も盛んな日本。地球のほぼ反対側に位置しつつも、その距離に反して密接な外交関係を築き上げてきた両国ですが、ブラジルの歴史や文化について我々はどれほど多くのことを知っているでしょうか。

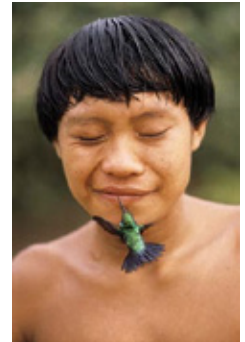
本展では、今なお伝統を受け継ぐ入植以前の先住民、大都市周縁に生きる人々など、多文化国家として知られるブラジルの礎や現在を写真作品を通して紹介します。



ティアゴ・サンタナ《ベルナンブーコ州、エシュ》2013年 ©Tiago Santana



ペドロ・ロボ  
《ジャカレの丘、リオデジャネイロ》  
2008年 ©Pedro Lobo



ローサ・ガウディターノ  
《ハチドリとヤノマミ族の若者（ブラジル、ロライマ州、デミニ村）》1991年  
©Rosa Gauditano

### 2. ブラジル写真の最前線を知る

日本でよく知られるブラジル出身の写真家にセバスチャン・サルガドが挙げられますが、ブラジルにはまだまだ日本に紹介されていない優れた写真家が多くいます。

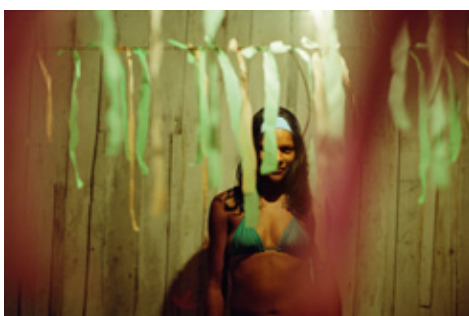
本展では、フォトシティさがみはらの理念でもある「記録・表現・記憶」に根ざし、ブラジルの現代を時に詩的な手法によって記録した写真家たちを紹介します。



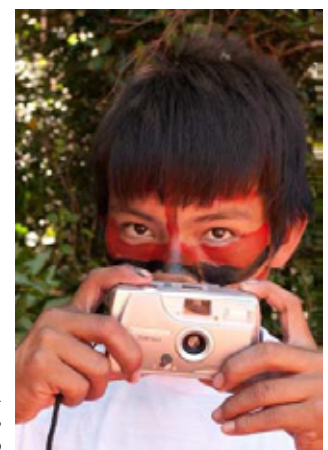
ティアゴ・サンタナ《アラゴアス州、パウメイラ・ドス・インディオス》  
2003年 ©Tiago Santana



ペドロ・ロボ  
《カランジル刑務所、サンパウロ》  
2004年 ©Pedro Lobo



ルイス・ブラガ《リボンの間の女性》2003年 ©Luiz Braga



ローサ・ガウディターノ  
《写真撮影を学ぶアラニ=カイオワ族の若者  
（ブラジル、マトグロソ・ド・スル州）》  
1991年 ©Rosa Gauditano

## 出品作家

### ルイス・ブラガ (Luiz Braga)

1956 年生まれ。70 年代からキャリアをスタートさせ、カボクロ（先住民と白人との混血）の生活を捉えたモノクロームや、暗視カメラを用いた作品など、人類学的アプローチと抽象的な表現を横断する作品を発表している。2009 年には、第 53 回ヴェネツィア・ビエンナーレにブラジル代表の一人として参加した。

---

### ローサ・ガウディターノ (Rosa Gauditano)

1955 年生まれ。新聞や雑誌社で働いた後、ドキュメンタリーフォトグラファーとして独立。ブラジルの先住民を主題に、工業化や白人社会のなかで時に融和し、時に闘いながら伝統を受け継いでいく彼らの様子を撮り続けている。

---

### ペドロ・ロボ (Pedro Lobo)

1954 年生まれ。建築写真を主に制作を続けている。被写体となるのは、ファベラと呼ばれる貧困層の住む街や、囚人虐殺事件の起きたカランジルと呼ばれるサンパウロ刑務所、土着の宗教と習合したキリスト教の教会など、ブラジルの過去と現在を背負う土地である。

---

### ティアゴ・サンタナ (Tiago Santana)

1966 年生まれ。1989 年からフォトジャーナリズムとドキュメンテーションの分野でキャリアをスタートさせる。主な被写体として、ブラジル北東部の宗教的な祭りや住民の伝統行事をモノクロームで撮影している。

## キュレーター

### 伊藤俊治

1953 年生まれ。美術史家・評論家。美術史・写真史・美術評論・メディア論などを中軸としつつ、建築・デザインから音楽・映画まで、20・21 世紀文化全般にわたる旺盛な評論活動を展開している。

---

### ロザリー・ナカガワ

インディペンデント・キュレーター。1979 年にサンパウロで最初の写真ギャラリー「Galeria FOTOPTICA」をトーマス・ファークスと共に設立。以後、キュレーターとして、ブラジルや海外の主要な文化機関で活動。展覧会のコーディネイトやキュレーションに加え、写真集の編集にも携わっている。

## 関連イベント

### シンポジウム「現代ブラジル写真の新たな展開」

本展キュレーターの一人である伊藤俊治氏を司会に、文化人類学者・評論家の今福龍太氏、写真家の港千尋氏をゲストに迎えたシンポジウムを撮影した動画を会期中に公開します。

※相模原市のYouTube アカウント（文化芸術のひろば）にて公開予定。

詳細な情報は以下URLにて随時更新します。

<https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/kankou/bunka/1022291/photocity/1023543.html>



## 開催概要

展覧会名（和） フォトシティさがみはら第20回記念事業 ブラジル現代写真展

コスモ・カオスー混沌と秩序 現代ブラジル写真の新たな展開

展覧会名（英） Photo City Sagamihara 20th Anniversary Exhibition

Cosmo-Chaos: New perspective in Contemporary Brazilian Photography

主催 相模原市総合写真祭フォトシティさがみはら実行委員会

共催 相模原市 相模原市教育委員会（公財）相模原市民文化財団

後援 外務省、文化庁、無錫市人民政府、トロント市、神奈川県、（公社）日本写真協会、（公社）日本写真家協会、日本写真芸術学会、（社）日本現代写真家協会、（社）日本写真作家協会、NHK 横浜放送局、エフエムさがみ、朝日新聞横浜総局、神奈川新聞社、相模経済新聞社、産経新聞社横浜総局、東京新聞、毎日新聞社横浜支局、読売新聞横浜支局、全日本写真連盟、神奈川読売写真クラブ、（株）タウンニュース社、高等学校文化連盟全国写真専門部、相模原商工会議所、相模原市農業協同組合

協賛 エプソン販売（株）、菊屋浦上商事（株）、（株）きらぼし銀行、相模ガス（株）、相模中央写真師会、相模原市印刷広告協同組合、相模原橋本ロータリークラブ、（株）ニコン、（株）ニコンイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ（株）

協力 女子美術大学 フォトシティさがみはらサポーターズクラブ

会期 2021年7月7日（水）－7月19日（月）[会期中無休]

会場 女子美アートミュージアム（女子美術大学美術館）  
〒252-8538 神奈川県相模原市南区麻溝台 1900

開館時間 10：00－17：00

問い合わせ先

フォトシティさがみはら実行委員会事務局

電話 042-769-8202（相模原市市民局文化振興課内）

042-776-1262（相模原市民ギャラリー内）